

おお うち 大内

大内自治区データ

(H27年10月1日現在/市HPより)

世帯数：58世帯	自治区戸数：49戸
人口：203人	組数：4組
平均年齢：49.88歳	高齢化率：36%
面積：196.6ha	
小学校区：九久平小学校	
自治区たより：大内だより	
集会所：大内町公民館（昭和60年度建築）	



大給の「大」と下河内の「内」を交え、中に「人」を配置。「大」は広さを「内」は仲間内を「人」は支え合いを表し、総合的にこの印の「大・内・人」は区民の優しい気持ちを表現しました。



大内の概要

昭和37年：松平町において、「大字下河内」と「大字大給」を併せて「大字大内」となる。

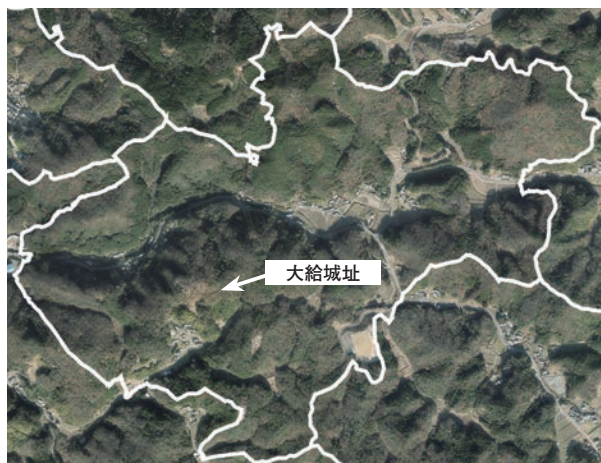
昭和48年：豊田市において、「大字大内」が「大内町」となる。

●大内町の地形等

地形は主に周囲が山に囲まれており、家々は盆地にある集落である。全体的に集落は概ねが一級河川「滝川」沿いに点在しており、水車を動力とした「ガラ紡」が発展した理由である。

「ガラ紡」は戦争で衣料が足らなくなり、特に戦争が終わると景気が良くなり、川沿いに住居を併設した「ガラ紡工場」作られた。

また当時は「大内町」の全世帯の7割程度をこの「ガラ紡工場」が占めていたが、時の流れで減少の一途をたどった。



名所・旧跡

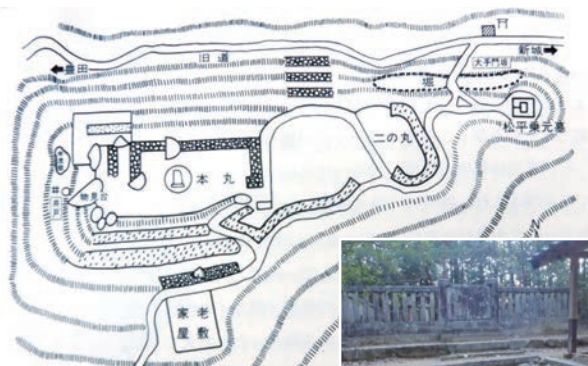
大給城址は、九久平の街の東方1km・巴川支流・滝川左岸に位置し、標高207mに立地、石垣・削平地・削崖・物見岩・米流し岩がある山城であった。

この城の特徴は、西・北・東を古式の石垣で固め西側の巨岩を物見岩という。東側を区切る石壁は石をタイル状に貼りつけたもので、他とは技法が全く異なり、この城で最古の石積み部分と評価されている。



又、言い伝えによると、米流し岩は合戦の際に水が豊富にあると思わせるため、米をこの岩から流し滝のように見せたといわれている。

なお、大給城址の本丸東方の尾根の上には、大給城主初代「松平乗元」の墓が石柵で囲っており、地元住民(旧大給)が清掃等を行い守っている。



大給城は、大給松平氏の本城であり、初代「松平乗元」から5代「松平真乗」まで続いた。

又、6代に当たる「松平家乗」は「徳川家康」の命により、上野国(現群馬県)へ国変えとなり、これに及んで城主がいなくなり廃城となった。

ここで滝脇合戦の一部を紹介すると、松平一族の内紛や領地所有ため大給松平氏の4代「松平親乗」が同族の滝脇松平家の所領を奪おうとしたのが原因であった。

結果として滝脇松平氏の初代「松平乗清」、2代「松平乗遠」まで討たれ所領は大給松平氏となり、滝脇は大給領分となった。

その後、滝脇松平氏の3代「松平乗高」が滝脇合戦の復讐のため、大給城に夜襲をかけ、これにより城は焼失した。

このため、大給松平氏の4代「松平親乗」は一時尾張に去った。

又、5代「松平真乗」は細川城に移り、この代に大給松平氏は一時復活したようである。その後の大給松平氏と滝脇松平氏の両家の関係は不明である。これをいわゆる滝脇合戦という。

(参考 松平町誌より)



主な行事

- 太田川河川敷で「区民ふれあいバーベキュー」を実施
- 自主防災訓練として、大規模地震を想定し、それぞれの組毎に「避難訓練」を実施
- 自治区若者が「快援隊」という組織を立ち上げ自治区名簿リストにより、安否確認訓練を実施
- 大給城址及び自然歩道の「草刈り等」を実施



大内の課題

当自治区は、松平地区の中でも高齢化率が高く現在においても、30%以上となっている。

数年後には、現状を鑑みると40%に迫ることが想定される。又、高齢者を抱えている世帯も多く介護問題など、特に徘徊者を含め今後増加の一途をたどることが予想される。

したがって、当自治区の諸問題を少しでも解決し、地域として支えるため「徘徊高齢者および、行方不明者」の捜索体制を整えたが、まだ多くの問題も抱えている。今後も区民の皆さんの協力と知恵で将来において、よりよい体制を整え安心安全な自治区になるように、みんなで心がけていきたい。

大内自治区民憲章

わたくしたちは、大給城址をのぞみ美しい滝川と太田川にかこまれ、あじさいの里と歴史と伝統をうけつぎながら、明日に向かって伸びゆく大内町の区民です。

- 1、自然を愛し歴史と文化のまちにしましょう。
- 2、花いっぱい環境を目指すまちにしましょう。
- 3、ルールを守り明るく楽しい元気なまちにしましょう。
- 4、防火、防犯、交通安全に努め安心安全なまちにしましょう。
- 5、心身共に健康で快適な生活ができるまちにしましょう。



長老コメント

柴田 栄さん

私は、七人兄弟の長男として生まれ、妹が四歳、そして、次に生まれてきた兄弟も四歳と五歳の時に前日まで、いづれも元気に遊んでいたが、急に発熱し、次の日に亡くなるという悲しいことがありました。

当時は、このような状況が多くあり、私の家族だけではありませんでした。

又、父親の兄弟の内、三人が軍隊に入りましたが一人が終戦四か月前に、二十四歳という若さで戦死致しました。

戦死者は「大内自治区」で十六名、松平地区で二百十七名の若い命が犠牲となりました。

現在の、恵まれた生活が当たり前と思っている私たちですが、同じ世代に「生」を受け若くしてこの世を去った身近な人々に対し、私は八十有余年を生きて色々な体験をしてこられたことが、何か申し訳ないように思えるのであります。

弟ら子供が急に亡くなった原因は何であったのか。大勢の犠牲者を出した戦争とはなんだったのか、いま思うところでございます。

当時を振り返ってみると養蚕を主体した農業時代から満州事変・太平洋戦争、そして終戦を迎えました。終戦後は、衣服の不足から「ガラ紡」が盛んとなり、「ガチャ万時代」という好景氣を迎えましたが、時代の変化により、「ガラ紡工場」は減少の一途をたどりました。その後、自動車産業が発展し、日本経済も急成長しました。会社務めの時代となりましたが、衣・食・住等社会環境すべてにおいて大きく改善されました。現在まで生きてこられたことに感謝すると共に、懐かしく思っている次第であります。